刑務所と芸術を考える
ー阻む壁、実践、その社会的意義

第３回
社会的意義：アートプロジェクトとしての“プリズン・アート”

刑務所と芸術

日時：2021 年 10 月 9 日（土）14:00〜16:00

2020 年 9 月から 2021 年 4 月まで、アメリカの MoMA PS1 という美術館において、展覧会「Marking Time: Art in the Age of Mass Incarceration（時を刻むということ：大量投獄時代におけるアート）」が開催されました。同展のキュレーターであるニコル・R・フリートウッドは、こうした“プリズン・アート”は、アウトサイダー・アートとは異なるものとして、「Carceral Aesthetics（監獄の感性学）」という独自の概念を提唱しています。これは、自由のない状況における時間や空間、限られた物質を創造的に利用して芸術を制作することを指し、刑罰制度と社会との関係性を可視化するものとして捉えられています。

つまり、作品そのものだけでなく、その作品が作られるプロセスや、その作品がどのような人々あるいは社会との関係性のうえにあるのかといったことに着目する必要があります。エクアドルの女性刑務所において女性受刑者とともに壁画を制作したミヤザキケンスケさんにお話を伺い、刑務所におけるアートプロジェクトが関わる人々にどのような影響をもたらしたのか議論したいと思います。

ゲスト：

- **ミヤザキケンスケさん**（画家）
- **熊倉純子さん**（東京藝術大学教授）

企画者：

・風間勇助（東京大学大学院博士課程 2 年 / 龍谷大学犯罪学研究センター嘱託研究員）

▼参加申込はこちら